

## 手のぬくもり

高橋 成章

去る十一月の末、お見舞に参上した時のことです。ベッドの近くに参り来意を申し上げると、「起こして」と付添いの方を促し、体を動かそうとされましたので、驚いて押し止めたことでした。寝たままで人と応対するのは失礼だ、というお氣持がそうさせたのだらうと思い、何時も変わらぬ先生の懇慫で礼儀正しいお姿を目の当たりにした次第でした。丁度、昼食時で、「食欲もおありですよ」という付添いの方の言葉に、私は安堵して、お暇を乞うと、そつと手をお出しになったので、私もそれに応えたのですが、お歳のわりには、ふつくらとした柔らかな手のぬくもりが、今に私の掌に残っています。これが、先生とお話した最後となりました。

私は附屬高校の校長として四年間——平成四年三月に先生が入院されるまでの四年間、先生のご指導を得たのです。

五、むすび  
校長という職務柄、学長室に何う機会が少なくなかったのですが、職務以外の話をお聞きすることがしばしばでした。「私はおしゃべりだから」と言われながら、時には子供の頃の思い出話や、少女時代の一夏、阿伏兔観音に籠もつて受験勉強をした時のこと、建学間もない頃に大病された時のこと等々……、日の短い折などには、暗くなつてから学長室を出ることも珍しくありませんでした。長々お邪魔しましたと申せば、先生は、私は毎日だいたい十

時ごろまでこの部屋にいるのだから、気に掛けないでくれと申されるのが常でした。

私が子供の頃、母は繕いものをしながら、いろいろと話を聞かせてくれたものでした——その母は私が大学在学中に病気で亡くなったのですが——先生のお話、苦勞話とも教訓ともとれるようなお話を聞いていて、私は母を思い起こすことがありました。先生から見れば、二十才ほど年下の私ですから、このような話をなさるのは当たり前だったでしょう。ともかくも、先生は人一倍忍耐強く努力を厭わぬ人であるとともに、心の温かい方でありました。

今にして思えば、入院される一年ほど前からでしょうか、「私はもう長くないから」ということを、しばしば口にされるようになりました。私はそれに気がつき、ある時、先生はお元気なのですから、その言葉は今後口にしないようにお約束していただけませんか、と申しますと、「そうしましょう、そうしましょう」と申されたのです。けれども暫くたつと、またその言葉を言われますので、言わない約束だった筈ですがと申せば、「そうでしたね」ということが数回あつたように記憶しています。先を見通しておられたのでしょうか。

ご入院中の一年余りの間に、本学園の新体制は立派に出来上がりました。「幽明界さかいを異にす」という言葉がありますが、ミキ先生は幽明の界にいられても、学園の新しい姿を見届けられて、心安らかに幽界にお入りになったものと思います。そして、あの世からいつまでも武田学園を見守り下さっていると信じています。

ご冥福をお祈りいたします。